



スウェーデンヒルズに立つ北欧住宅

北海道的田園生活 ～農村に住む都会人～

近年、中高年層の農村移住が話題となっており、その受け入れをめぐって、過疎に悩む全国の自治体間で激しい競争が繰り広げられている。その移住希望者の中で特に人気が高いのが沖縄と北海道だ。特に北海道の農村は、その豊かな自然や広大な景観に加え、明治期以降、全国各地からのさまざまな移住者によって計画的に形成された

んが難色を示した。そんな折、たまたま家族で行った北海道旅行が川島さんの人生を急変させる。北海道なら北米的な生活を始める。

北海道を車で走っているうちに、「日本にもこういうところがあるのか」、「北海道なら、北米と変わらない生活スタイルを楽しめるのではないかと考え始めていた。その後、何度となく北海道を訪れたが、スウェーデンヒルズのゲストハウスに泊まってみて、即座に北海道移住を決定した。北海道に観光旅行に行くと、土産に宅地を買ってきた」と笑う。もちろん、勤めていた商社を退職しての移住である。急ぎよ、仕事を探さなければならなくな

った。やっぱり北海道は仕事が少ないですね。学習塾の教師の口を探したり、ハロワークに通ったりしましたが、たまたま新聞で「㈱ピー・ユー・ジー」の求人広告を見て応募し、採用されたのです。**北海道のシリコンバレー**

北海道大学の学生たちが作った「㈱ピー・ユー・ジー」は、その技術力とユニークな経営で注目されていた。最近でも、遠隔地の家族に独居の老人の安否を知らせる電気ボットの開発や、太陽電池のパネルを背負った赤外線ワイヤレス監視カメラを備えた、農園監視装置の開発などで話題を集めている。その本社が立地しているのが、札幌市郊外の広大な道立野幌森林公園に隣接する樹林に囲まれた札幌テクノパーク。大手企業の研究開発部門を含め30社がオフィスを構えている。北海道のシリコンバレーといったところである。

念願の北欧住宅

その「㈱ピー・ユー・ジー」に入社した1995年に「スウェーデンヒルズ」に念願の北欧住宅が完成し、川島さん一家の田園生活が始まった。北海道には考えられない1時間の長距離通勤に加えて

ため、新たな移住者を受け入れる基盤が整っていること、「コミュニティ」に都会的な寛容さがあるといわれている。そのため、これまでも数多くの都市住民が北海道の農村へ移住してきたが、最近増加している移住者の多くは、特異な技能や財産あるいは超人的な意志を持たない、いわゆる普通の人々だ。したがって、きちんと仕事を持っている人も多い。これらの人々は、それぞれの工夫と努力で広域分散や積雪寒冷によるデメリットを克服し、これまで「トレードオフ」の関係にあると考えられてきた生活環境と仕事の両立を図っている。そして、北海道にはこれを支える基盤が整備されているのだ。本シリーズでは、このような視点から、北海道における多様な「移住・長期滞在・二地域居住」を考えていく。

過疎と高齢化に悩む都市周縁農村

一般に、都市近郊農村は、当初は都市の発展とともに労働力を供給するために人口が減少し、さらに都市が発展を続けると郊外住宅を供給することによって人口が急増する、という人口動態をたどるが、通勤・通学圏に含まれない周縁農村の人口減少傾向は止まらない。札幌の北東に隣接する当別町も、そんな周縁農村の一つである。札幌中心部から北東20キロ付近に広がる人口2万人足らずの平凡な農村であり、その広大な田地は、明治初年に伊達家主従が先駆的に移住して以来、多くの困難を克服して開拓されたものである。近年は、野菜や花卉などの生産にも取り組んでいるが、ご多分にもれず過疎化と高齢化に悩んでいる。

スウェーデンヒルズ

その当別町の市街地から田園地帯を車で10分

現在では週の過半を霞ヶ関にあるオフィスで過ごすことも多い。それでも、川島さんの生活の拠点は、あくまでも当別町なのだ。週末は、隣近所の仲間たちとテニスで汗を流し、庭仕事に熱中する。冬は「かんじき」をつけて森の中を歩き回る。小学生の長女はスキーを習い始め、三浦雄一郎氏が主宰するスキー学校に通うなど、一家で北海道の生活を楽しんでいる。

当別のヒルズ族

スウェーデンヒルズに家を持つ人の60%は本州からの移住者か、季節的な長期滞在者である。もちろん、川島さんのように現役バリバリのサラリーマンもいるが、60歳、70歳代の人も多く、テニスやゴルフ、コースなどのクラブ活動が活発なものも特長である。二年前に川島さんのご両親も関西からこの一画に居を構えて引っ越してきた。テニスの国体選手だったお父さんは、その腕を生かしてクラブ会員たちの指導にあたり、住民サロンは旅行を計画したり、時々には教養講座も開く。空き巣事件があつて、さっそく警備会社を呼んで泥棒の手口や警報システムを勉強し、葬式研究会では、戒名について勉強している。また、農産物の直販や貸し農園などを通じて周辺の農家との交流も活発だ。川島さんは、住環境がよいといっただけでなく、「コミュニティ活動が盛んなのがよい。私も65歳からはボランティア活動をやる」と心に決めている。

仕事と田園生活を両立

作家や医師、弁護士などの専門職なら、あごがれの田園生活を求めている移住もさほど難しくないが、サラリーマンは会社を辞めた途端に、再就職という壁にぶち当たる。特に、地方での再就職が困難であるのは川島さんの例を見ても分かる。し

ほど走ると、緑に覆われた300ヘクタールの丘陵に、スウェーデンから輸入した北欧住宅600戸が木々の間に点在する。スウェーデンヒルズが現れる。元々は石狩新港地区の住宅地として開発されたものであったが、新港開発が当初の目論見とは大きく外れてくると、単なる住宅地から質の高い住宅・別荘地へと大幅に開発コンセプトを転換した。建築協定によって、塀のない広い庭の芝生や花壇は美しく管理することが義務づけられているなど、住宅街全体の雰囲気も北歐風に統一されている。また、その中心にあるスウェーデン文化センターの工房では、優れたデザインで国際的に評価の高い家具やガラス製品などの製造技術の研修が行なわれている。当然、スウェーデンとの交流も盛んで、夏至祭やクリスマスなどは子供たちを夢中にさせる。そんな雰囲気にあこがれて、ここに移り住んでくる人も多い。

海外移住が北海道移住か

「コンピューターソフトの関連企業がひしめく札幌の中で、中心的な存在である「㈱ピー・ユー・ジー」社長の川島昭彦さん(45歳)もそんな一人である。関西で生まれ育った川島さんは、大学を卒業して大手総合商社に就職、入社後の約10年間をアメリカカナダで日本企業の進出を支援する事業に従事した。業務上、どうしても海外での滞在時間が長くなると、カナダ西岸のパルーバヤカルフォルニアのシリコンバレー、ミネソタ州ミネアポリスの生活は日本よりゆとり、のんびりしていると感じ始めていた。そのため、地価の高い東京での生活を切り上げ、「こちらに根をおろそうか」と考えた時期もあったらしい。しかし、海外移住を決定する段になら、川島さんよりも在外経験が長く、海外生活の大変さを身をもって体験していた奥さんの友紀さ

かし一方で、川島さんが辞めたのは会社であった。仕事を辞めたわけではないという。見逃してはならない。現に川島さんは、㈱ピー・ユー・ジー入社後も、これまでのキャリアを生かして、海外企業との合弁事業や会社の立ち上げに従事し、新会社の社長に就任したりもしていた。昨年5月に「㈱ピー・ユー・ジー」に社長として戻って来てからも、長距離通勤や東京での単身生活を甘受しながら仕事にまい進している。仕事と田園生活を両立させているのである。



自転車に乗る川島昭彦さん

もちろん、川島さんの成功例が一般的だといっているわけではない。背景には、当然のことながら氏の高い能力や豊かなキャリアもあるし、これを支える運もあつたのかも知れない。しかし、「どんな会社の社員であるか」ということよりも、どんな生活をしたか」という点から逆算して、自ら仕事の環境を組み立て直す人々が増えているように思える。そんな人々の生活の場として、豊かな自然や整った基盤施設、さらには洗練された都市との近接性を有する北海道の農村が注目されているのではなさうか。

レポート

書永 哲(NPO)の演劇工房副理事長(



森に囲まれた札幌テクノパークのビー・ユー・ジー



スウェーデン文化センター



庭造りを楽しむ